

「浮世絵お化け屋敷」展

太田記念美術館（原宿） 24.08.03～09.01（前期）09.06～29日（後期）

本展は、妖怪や幽霊を描いた浮世絵に着目する催事で、「歌川国芳」の代表作《相馬の古内裏》を筆頭に、「歌川国貞」や「月岡芳年」といった浮世絵師が手掛けた「約170点」の作品が紹介されている。（前・後後期で展示替え）

<浮世絵の名品や“ユーモラス”な妖怪を描いた作品>

「国芳」の著名な下記の2作品に、「芳年」の《新形三十六怪撰おもみつら》など浮世絵の名品が一举に公開されている。さらに、踊る猫又、人間のような表情をした河童、不思議な形の妖怪など、怖いだけではなく“ユーモラスな妖怪の姿”の作品も数多く紹介されている。

歌川国芳《相馬の古内裏（ふるだいら）》 1846年（弘化期）頃 大判3枚続



巨大な骸骨の描写は、それまでの読本の挿絵などの骸骨とは、比べものにならないくらい正確かつリアルで、その雰囲気は夏祭りの見世物小屋の楽しさを彷彿とさせる。

歌川国芳《源頼光土蜘蛛（つちぐも）の妖怪を斬る図》文政前期 大判2枚続



源頼光が病の床に伏していたある夜、一人の僧が現れ千筋の縄を投げつけたが、頼光が枕元の名刀膝丸で斬りつけると化け物は退散した。

駆け付けた四天王が血の跡をたどり、巣窟で大きな蜘蛛を退治した。

国芳は蜘蛛に切りつける頼光と、びっくり仰天の小姓を動きあるダイナミックな構図で描いている。

<初公開の新蔵作品の公開>

新たに当美術館収蔵された作品から「38点」が初公開され、歌川国芳《当三升四谷聞書》など、新たな作品を目にすることができる機会である。